

放す婆でねエ奴が、たゞ氣絶したばかりで、どうも變だ、事に依るに旦那、最初の三兩と今の五兩と都合八圓、あの婆に遣られましたぜ、七味屋め彼奴も何か業をしさうな野郎だツたが、とシだ剛敵に出喰して空手のまんま加之も青くなつて遁出しやアがツたよ、ハ、ハ、」

「なるほど、さうかも知れないね、しかし豪い婆アだよ、いくら恥辱も外聞も構はないしろ俵あと思ひ切つた藝は出来ないもんだよ、強慾も因業も人間あれまで功を経て來ると確かに一の藝だ、現在まだ今の唸り聲が耳の底に残つてる我々の眼前を、ひよこく平氣に濟し込んで、どツかへ出て往つた工合、いやはや黙つて拜むより仕方がないね、ハ、ハ、あの七味屋なんかア世間普通、慾にも悪いにも際限のある奴だから逆も及ぶ筈がないさ」

「眞實ですよ旦那、あといふ婆は百まで生きて居たツて現世で業の曝しきれねエ奴ですからうぬが定命に息を引取つても、その死際ア定めて怖ろしからうと思ひますよ、きつと四邊近處の誰かへ怨恨を残しますぜ」

「ハ、ハ、ハ、酷く急に怖れ出したね」

「今までと違つて、何だか妙に怖氣が付き出しましたよ、どうせ旦那ア長く居らつしやる筈はねエが、この熊なんかア生涯こゝを動く事の出來ねエ人間ですから、いづれ旦那、あの婆の死際に出喰しますよ」

「ハ、ハ、ハ、そんな事は儲置いて、生涯こゝに居ない方が宜からう」

「だつて居ずにやア居られませんよ」

「いや、其うち何とかなるだらう、この大浦卓三の出る時にはどうかしやう、實は過日から思つてるんだ、辻傳を曳かして置くには惜しく出來てるよ」

折しも戶外に窺ふ朝鮮婦、

「何卒その砌は拙者も、熊さん宜しく取持を頼むよ」

「おや、いつの間に汝、腰が立って歩けるんだ」

「これさ熊さん、お互は兎も角、旦那の前だけは戯談を止して貰ひたい」

「ハ、ハ、何が戯談なもんか、あつと最初に變な一聲を出したまよ、あの石作と抱合ッて腰は抜ける物は言へず、ぶるく震ッて居たといふぢやアねエか」

「なアに、ちよいと其場の工合で、まさか嘯り付かれた石作を振放す事も出来なかつたからね、ハ、ハ、ハ、」

大浦卓三、いづこよりか一封の書状を添へて自用車に迎へられつゝ、朝の九時ごろ俄に立

出でしが、生憎その後へ来りしは例の妻女と妹の高島田、萬緑叢中の紅一點といふ諺あれど

これは正しく眞ツ黒なる煤の中へ落散りし薄紅と眞紅の名花二輪、加之も朝日に射す影と小袖の匂ひ、ちらと破障子の穴より差覗くや否、等しく一時に飛んで出でしは朝鮮婦と花野

露雄、おもはず互に顔を睨み合せて、意氣地に募る鞘當よりも怒と色との眩當なり、

「何だね花野さん、拙者が居るよ、すッ込んでる方が身のためだ、わざ／＼また恥を掻きに出なくツても宜からう」

「お氣の毒だが八卦屋さん、其方こそ出幕が違ッてるよ、實は過日あらまし太夫元と内談の出来た僕だ、どんな藝をするか黙ッて見物するが宜いさ」

「おや、この馬の脚め、蹴躓いて折れない用心しろ」

「何、この筧竹亡者め、そんな下手ツ糞の卦で他の事が分るもんかい」

向側の西川と石作が壁越の笑ひ聲、

「また始まつたぜ石作さん」

「困ったもんだね」

「今日こそ叩き合つても掴み合つても、うっちゃって置かうぢやありませんか、癖になつて

蒼蠅いよ」

「さうだよ、どツちか怪我をする方が宜いね、まアそれまで差控へるさ」

きくや否、實は叶はぬ朝鮮髻、はツと俄に自己が塙へ飛込で今は力と頼むもの壁一重に熊

公が鼻の外なし、

「細君、今そこへ鄰屋の色狂者め、のこく出かけるかも知れないからね、大將の御不在中、

御兩女へ間違のないやう氣を付けて下さい、熊さんが居らないで心配だ、ついでに拙者よ

り宜しくとね、早速御挨拶に行く筈だが少々、出られないんだよ」

熊公の女房、あまりの馬鹿々々しさに返事もせず、たゞ二女に對うて身を縮めながらの笑顔、

いつも自然の世話に出来たり、

「いえ先刻、つい一時間ほど前で御坐いませう、何處からか急の御迎ひで、其お俵に召して

往らッしやいましたが、暫時お待ち遊ばせば」

「さうですか、では暫時ね、しかし毎々さぞ御厄介で御坐いませう、何分、我まよな良人で

すから」

「とんだ事を、手前こそ、いろく御親切を蒙って居りますよ、只今も壁越で何か妙な事を

申しました、あれは淺草へ出る八卦屋なんですが、あゝいふ貴女、くだらない恍けた人間

にまで優しく仰しやる旦那様ですから、つい宜い事にして長屋中の者が、ホ、ホ、ホ、だが

身分の違つた、こんなところは却つて旦那様の方でも、面白をかしくツて、お慰みになる
んで御坐いませう、ホ、ホ、

「あら、まア、ひどい事を」

「いよえ貴女、眞實で御坐いますよ、どうせ正當の世間には身を容れる穴のない連中ですも
の、一人として満足に出来たものは居りませんさ、ホ、ホ、」

折しも半ば開きし表障子の外より尻目づかひに花野露雄、空屋の瘦鼠こよに蒲焼の香を嗅
付けしが如く、ちよろくと姿を現はせば、熊公の女房、おもはず吹出しぬ、

「御覽遊ばせ、あよいふ不思議な生物も往んで居りますよ」

きくや否、得たりと朝鮮髻また自己が垢より饒舌出しぬ、

「細君、危険だよ、何とかして早く追ッ拂はないと不可よ、萬一お二女に間違があツちやア

大變だ、現在その通り正氣でないだからね、たど呵しく笑ツて濟まない奴だよ」

折しも向側の業突張お虎婆、例の唸り聲に八圓の味を占めし以來、ますく事あれかしの皺
面そろりと差出しながら、幸ひ此狂氣を種に一仕事また喰付かんと野心、わざと聲を潜め
て招き入れぬ、

「俳優さん、お這入りよ、あの八卦よい屋め何を吐したツて構はないさ、ありやア彼奴の持
病だからね」

目と鼻の間に差對ひの上等棧敷、これ有難いと色狂者そのまよ恥かし氣もなく手を合して飛
込めば、熊公の女房、はツと驚いて今まで開きし障子を音高く、ばかりと閉切りぬ、

「いくら白晝でも貴女、山中の一軒屋と同じ事、うツかり油断のならない長屋で御坐います
よ、妙な化物ばかり巢を構へて居りますからね、ホ、ホ、」

「あら、まア、いくら何でも、ハ、ハ、ハ、」

「いとえ眞實で御坐いますよ、今あの向側から不意に顔を出した皺くちや、あれは貴女、旦那様さへ過日、とんだ事で實は閉口なすつたくらゐの因業婆なんですよ、それに今この前を、ちよろ／＼して居て飛込んだ奴、あれは色狂者、壁越に蒼蠅く饒舌るのは慾狂者、また外に貴女さま／＼と面白いのが居りましたね、朝から晩まで絶えず半商賣のやうに吼えたり嚙合つたり致してゐるんですもの、何かの因果と諦めて、仕方なしに住めばこそ、もし外に遁出せる親類の端くれでもあれば一日だって貴女、辛抱の出来るところは御坐いますよ、ホ、ハ、ハ、ハ、」

折しも歸り来りし大浦卓三、それと見て首を出す朝鮮髻、

「や、お歸りですか、先刻から奥様と妹御が入らつしやいました御待受」

「また二女で遣つて来たんだな」

「ところが、あの馬の脚め、困つたもんで御坐いますよ、そろ／＼また例の色情狂を始め出しましてね、

「ハ、ハ、ハ、罪のない男だね」

「どうして貴君、なか／＼彼奴あれで罪のある奴ですよ、あまり大目に御覽なさると何を仕出來すか、恥辱を捨てた馬鹿と掘ぬき井戸は底の知れないもんで御坐いますよ」

「なアに底が知れ無きやア、上から蓋を、ハ、ハ、ハ、」

いつもながら悠々たる態度、懐手のまゝ自己が埒に入りて、待受けし妻と其妹に對ひつゝ壁際の大胡坐、

「過日、来た時、さう言つた筈だ、また手紙を出すまで必ず来るなと、しかし今日は運よく

汝達に小言のいへない事があるからね、まア兎も角、怒らずに置かうよ、ハ、ハ、ハ、」
良人は二十貫目以上の大兵肥満、妻は色白に細面の小品といへば、聞いて不似合に思へど、見
ては男としての立派さに女としての優しさ、吹いて飛ぶやうなる當世流のハイカラに大退曰
の如き廂髪の搦むよりは、寧ろ却って一種いふべからざる、男女の配合と夫婦の調和、加之
も互に愛の相場と圓滿の時價を賣買せぬだけ猶更自然の美なるところありて、姉の影に潛み
姉婿の此方に坐せる十八の高島田、これぞ時に取って根じめの名花一輪なり、
「どうせ今日は、叱られる覺悟で、まゐりましたの、實は淺草へ參詣いたしましたから、つ
い吾妻橋を渡って、しかし良人どちらへ、お俵で急に、お迎ひが來たさうで御坐いますね」
「なアに例の一件さ、面倒だから委しい事は、おひく話すがね、兎も角も安心しろ、いよ
いよ乃公の思つた通りになつて來たよ」

「おや、どういふ工合に」

「つまり斯うだ、債權者一同が反對に立往生の結果、その總代に頼まれてる黒川といふ辯護
士がね、今朝、急に俵で迎ひに來たから、往つて見ると果して思つた坪だ、まづ第一に差
押は無論あのまゝ解いて借金は銀行利子に毛の生えた年八分五厘で七個年の据置き、さら
に、運轉資本五萬圓を出して、今一奮發この乃公に働いてくれといふんだ、ハ、ハ、ハ、どう
だい、さのみ悪くも無からう、なか／＼大浦さんは案外、上手な呼吸のある方だよ、好い
御亭主を持つて汝も幸福だぜ、今後ますます大事に仕なさいよ、ハ、ハ、ハ、」

「あら、まア、さうですか、よく觀音様へ御參詣いたした事、實は良人の居らつしやる方角
ですから、此ごろは一所懸命に御願を申してゐるんですよ」

「おい／＼、觀音様より今いふ通り、この御亭主を粗末にしちやア不可せ、ねエ鶴ちゃん、

ハ、ハ、ハ、

「そりやア良人、勿體ない事ですが觀音様は随分、諸方に御坐いますよ、しかし良人は世界中お一人だもの、ホ、ホ、ホ、だが妾も良人からは一人の筈ですよ、それとも外に二三人、どツか隠れて居やアしませんかね」

「うまい、うまい、こいつア、うまく出来た、ハ、ハ、ハ、ところで、近日、いよくこゝを出なくツちやアならないが、さて何だか、妙に名残り惜しいやうな氣がするね、保養かたぐ、もう一月も居らうか、いッそ汝達を引取ツて、おい鶴ちゃん、どうだ、この長屋で嫁入しないか、面白いぜ、幸ひ實に結構な婿のなり人が居るぜ、ハ、ハ、ハ、ちよいと見せてやらうか」

「また、姉さん、だから妾、來るのが嫌ですわ」

「なアに平生の戲談だよ、良人も何ですな、つまらない、妹だツて可哀さうに、いろんな心配して來るンですよ」

「御免下さい、ハ、ハ、ハ、」

女心の猶更人しれぬ胸を痛めて、この末いかになり行くかと思ひし一家の破滅を免れしのみか、降るだけの雨も降りて世諺にいふ地の固まりし嬉しさ、三月あまり聳めし愁眉と共に大浦商會も再び元の如く開き直すべしとの委細を聞くや否、日本晴の心地に牙渡る姉妹の風情いと美はしく、鄰屋の熊公が女房へは一入の愛嬌を残し、朝鮮髻にまで會釋の小腰を屈めて、いそくと長屋を立出でし後姿に、魂魄ぬけ殻の色狂者、お虎婆の塙より首を差出しながら、ほつとして見送りぬ、

「やア花野さん、どうだね」

大浦卓三が不意の聲に、はつと氣を取直すべき筈ながら、あはれや此奴いよく氣が上せて五體の調子を失ひ、一種異様の微笑を浮べつゝ入來りぬ、

「只今は、御細君が入らつしやいましたね、今日で二度お見受け申しますが、實に御容色の美しい方で」

「ハ、ハ、ハ、あんな女は美しいも醜いも仕方がないよ、しかし妹の方は少々、見られるやうに出來てるからね、どツか貰ひ手があれば周旋して下さい、ことし十八だ、いつまで捨てよも置けないさ」

「へエ、全體、どういふ人間が御希望で御坐います」

「なアに男でさへありやア宜いんだ、さう世の中は此方の注文通りに行くもんかね、つまり

「でも職業が身分に」

「職業も身分も入らないよ、その男に遣るんだから」

「なるほど、さうですな、職業にも身分にもよらない、その男に遣る、時に、いかゞで御坐いませう、甚だ突然で、失禮かも知じませんが、過日、この拙者に妻帯せよと仰しやいましたね」

「さうく言つたよ、ハ、ハ、ハ、いろんな女の怨恨をうけない今のうち早く妻帯した方が身のためだど勧めたね、ありやア眞實だ、第一そのまゝ一人で居ると危険だよ、どうしても女難に掛りさうだからね、ハ、ハ、ハ、」

「いえ實は此ごろ頻りに、その用心ばかり致して居りますよ、ところで、拙者には、どんな妻が向きやせう、もし御心當りでもあれば、ちよいと、お洩しを願ひたう御坐います」

「さういはれると、さて、その心當り、ないでも無いがね、言出して見て萬一、氣に入らな
いと困るよ、可哀さうに娘盛りだから、恥辱になるさ」

花野露雄、もはや堪らず、我を忘れて膝を進めながら、てかノノ光りし出額に例の反齒を剥
出しつゝ、如之も一所懸命の眼を据ゑながら、じつと大浦卓三の顔を打守りし體に、二十貫
目の大兵も何とやら聊か薄氣味わるくなりぬ、

「花野さん、ちよいと待った、實はね、その娘の縁談に付いて、内々あの八卦屋に相談した
事もあるから、まづ一方の返事を聞いて後にしよう、や、八卦屋さん、居るかね」

さらぬも身を潛め耳を敏てながら、そつと熊公の堀まで壁一重に攻寄せし朝鮮髯、かくと聞
くや否、麥藁細工の笛に等しき聲を張上げぬ、

「先口々々、兼ての御内談は出来て居ますよ、只今それへ拙者が取極に伺ひます、全體どこの

何奴が来て居るんですい

色狂者と慾狂者、朝鮮髯が犬の如く吼えて嚙付けば、花野露雄は猿の如く齒を剥いて引ッ搔
く騒動、また例の摺み合を始めしが、二十貫目以上の大兵を備へし大浦卓三に襟首を掴み上
けられて、犬も猿も一時に左右へ凹垂れぬ、

「ハ、ハ、相變らず困ったもんだね、どうして二人さう交誼が悪いんだよ、同じ長屋に住んで
居、如之も壁一重ぢやアないか、馬鹿々々しい、八卦屋さんも少しやア自分の家業と年齢
を考へるが宜い、また花野さんも愛嬌を賣る俳優に似合ないこつた、大切な顔面道具に疵
でも出来ちやア事だぜ、まさか舞臺の稽古でもあるまいよ、ハ、ハ、ハ、」

眼の前に止手さへあれば、もはや大丈夫と心得て、なか／＼強い朝鮮髯、蟻螂に似たる細首を

振立てぬ、

「ことし四十八の幸運齋、まして聖人の四徳を傳へて以て業と致す身ですが、その青二歳め馬の脚の分際も顧みず、いつも拙者に對うて無禮を働きますから拙者また止むを得ず易は變也、即ち時に隨ふ變易の術を以て其奴に」

「おい／＼、くだらない事を饒舌るに及ばないよ、こよは淺草でないから、まア暫く黙ツて」一方を押ふれば、また一方に逆も當らぬ今年の南瓜野郎、いよく色づいて鼻持のならぬ體なり、

「どうせ年が年中、心にもない怨恨を受けたり妬まれたりするの覚悟の前で、いはど當然の身ですが、八卦屋のやうに露骨の眞正面から來られちやア、いくら何でも堪忍が出來ませんとよ」

大浦卓三、おもはず身を反しての高笑、

「ハツハツハ、なるほど、こりやアさうかも知れないよ、兎角、色男といふものは他の嫉妬を受けるに極ツてるさ、ハ、ハ、ハ、しかし花野さん、もはや五十に手が届いて、ほしやほしや髻でも生える人間が、たゞ岡焼ばかりで子息のやうな年齢の違つた若い人に喧嘩を吹ッかける理由は無からうさ、ところで、今の縁談一件だが、つまり大浦卓三が悪かつたよ、一方に先口の内談をして置いて、また汝さんに相談しかけたんだからね、ハ、ハ、ハ、いッそ今のうち雙方ともに諦めて貰はう、實は先刻、こよへ來た妻の妹だがね」

いつの間に歸りしか、折しも鄰屋より壁越に熊公の大聲、
「旦那ア、そんな馬鹿野郎の先口も後口もあつたもんぢやアねエ、手ッ取早く今この鼻アを直ぐに叩き出しますからね、少々御不足ア堪忍して、わッしに下せエな、あけても暮れ

ても拜み奉つて大事にかけますぜ、ハ、ハ、ハ、」

「や、こいつア妙だ、細君さへ承知なら早速遣るぜ」

朝鮮髻、手を拍つて踊り出しぬ、

「めでたいく、さしづめ拙者が媒酌人こりや目出たい」

大浦卓三が制するも聞かず、竹細工に等しき手足を跳飛して、頻りに踊り出す向脛へ無念殘念の花野露雄、がぶりと喰ひ付けば、きやツと叫んで忽然また一喧嘩を持つけぬ、

親より子に對して十萬圓の財産を無事に遺さると、百萬圓の借金を其まゝ譲らると、いづれを取るかといへば、その十萬圓の遺産を固く守りて年々の利子に衣食住の安樂を事ふるよりは、寧ろ百萬圓の負債を兩肩に荷うて奮勵一番、これを首尾よく捻直すか美事に踏倒す

べきもの、正しく大浦卓三の如き男なるべし、

人間は容貌の大小と體量の輕重をもて論ずべからずと雖ども、のツしりとして二十貫日以上
の悠々たる風采は、既に尋常一般の商人に不似合なる男、まして失敗の結果その財産を差押
へらるゝや、七人の債權者に對うて一言の哀も乞はず、妻子を他に預け自己は飄然として八
軒長屋の奥に蟠居しながら、箸にも棒にもかよらぬ一蓮托生の化物どもを相手に無頓着なる
我まよの洒落滑稽を極め、加之も其間に敵を引寄せて翻弄するが如き大膽なる言語中また案
外の巧妙なる圓轉滑脱を含みつゝ、いつしか攻守の地位を轉倒して例の高笑ひ、蜂でさへ倒
に家を作りますとは凄けれど愛嬌あり憎けれど面白き男なり、

競賣期日の間際に神戸より持込みし六萬圓の破産申請は、まづ第一に取消されしのみか、今

後ますく却ッて取引上の地盤を固め、十三萬圓の借金は其まよ七個年の据置と定め、さらに五萬圓の流通資本を債権者の頭割に出させ、都下あらゆる新聞紙上に半ページづよの廣告を掲げて、こよに再び清韓貿易の大浦商會は雨後の明月に等しく、一時の黒雲を破ッて京橋の中央へ差し上りぬ、

加之も其廣告の末に大浦卓三が一個人の資格として左の如き一節を添へぬ、

借金のために財産を差押へられ一時閉店致居候處幸ひ身體に異狀無之また商品運轉上にも差支無之者と認められ更に債権者一同より倍舊の借金を重ねて再び開業仕候間此段辱知諸君に御安心を乞ひ併せて四方の顧客諸君に改めて御引立を奉願上候 以上

清韓貿易大浦商會主人 大浦卓三謹白

三月の間、八軒長屋の九尺一間に二十貫目の大兵肥滿を横へながら、どこに五體の急所あるやら日夜たゞ高笑ひせし大浦卓三、いよく暫し浮世の外に等しき破疊三枚の上を放れて、またもや生存競争の眞ッ只中へ伸張出でぬ、

同じ浮世の落武者ながら、酒屋の小僧に攻めぬかれ味噌醬油の通帳に陣笠を叩き割られし雑兵ではなく、敗れても金鑢形の眉廂深き大將分、暫時こよに身を忍んで敵の動靜を窺ひしが、時こそ來れと盛返せし大浦卓三、いよく再舉の旗印を翻へして八軒長屋を立出でぬ、三月越に假寐の夢を包みし白毛布三枚は、其まよ朝鮮鬚と西川と石作の三人へ記念に残し置きつよ、別に酒肴料とせし三圓づよを長屋中への一列一體、お虎婆にも花野露雄にも脱漏なく配りし上、いよく改めて挨拶に立廻りぬ、

「さて長らくの間、皆さんの厄介になりましたよ、しかし、どうか斯うか這出す抜け穴を目ツけて兎も角、また元の京橋へ歸りますからね、もし、あの邊を通行の節は遠慮なく立寄ツて下さい、おかげで百日あまり世の中を忘れて暢氣に面白く暮しましたよ、ハ、ハ、ハ、なアに實は蒼蠅い嫌な浮世に舞戻つて、わざ／＼苦しい樂屋の貧乏機關を染直しの借金癖で張通すよりは、人間生涯の差引勘定、こゝに此まゝ寝轉んで氣樂に好きな馬鹿口でも叩いて居たいのだが、これまでして來た罪が重くツて、さう安く問屋で卸してくれないから、つまり残つた年貢納めに引出される結果だ、ハ、ハ、ハ、これを考へると其口に少々不足はあツても、身體が丈夫で氣に心配なく暮せば結句どれほどの幸福か知れないよ、だから随分お達者に長屋中、ますます交誼よくしてね、いはゞ一家内も同然だ、何かの深い因縁で斯ういふ工合に落合ツたんだらう、幾久敷お互に睦み合ツて貰ひたい、強ち此處を這出るのが

人間の出世ぢやアないよ、まして壁一重で居ながら八卦屋さんと花野さんのやうに、どういふもんか顔さへ見りやア直ぐ其場で掴み合ツたり噛合ツたりは甚だ宜しくないね、ハ、ハ、ハ、」

みす／＼虛病の藥代に八圓を唸り取られしお虎婆にさへ、あらためて三圓づゝの酒香料を送りながら、わけて心易くせし壁越の熊公夫婦へは何一品も與へず、妻女の許より迎ひの車に飛乗ツて長屋中に見送られつゝ、笑微を含んで其まゝ馳去りし後に、まづ第一の不密を打ちしは朝鮮髻、そつと熊公の袖を引いて私語きぬ、

「熊さん、羨む理由ぢやアないが特別に前以て内々、うまい事をしたね」

「なアに乃公だけは、どういふもんか御多分に漏れて貰はねエよ」

「そんな筈があるかね、全體、幾何になツたい」

「卑しい事をいふない、同じ一棟に住んでる長屋一體の中で、うぬばかり餘計に物を貰って其まゝ猫糞にするやうな男ぢやアねエよ、もし萬一そんな事がありやア其場で辭退する熊さんだ、まさか乃公一人に下さらねエ理由もなからうが、こりア旦那が忘れたんだらう、どうしても貪乏圖に出來てるよ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

「そいつア濟まない、拙者これから追ッかけて、お願ひ申さう、第一あの因業な糞婆や鄰屋の色狂には入らないこッたよ馬鹿々々しい」

「おい、つまらねエ事を言出してくれるない、氣の毒と思やア皆が貰った中で酒の一杯も心持よく飲ましくれエ、それで澤山だ」

大浦卓三が三月越こゝに假寐の夢を包みし白の大毛布三枚を、一枚づゝ紀念に貰ひ受けし朝鮮髯と西川と石作の三人、熊公たゞ一人が長屋中一體の酒肴料に漏れしと聞くや否、義理人

諸

かじり

大待衛 熊三郎 女房 三十七

幸運 齋 四十八

新伴 齋 馬の 花野 齋 雄 二十二

八軒長屋

隠雪總

だばめ

長屋の

お虎草の 大待衛 三十七

かじり

西川 齋 五郎 三十八

石川 齋 三郎 三十七

情このまよでは濟まぬと顔を鳩め出しぬ、
されど本人の熊公は相變らずの無慾淡泊、つまらねエ事を言出してくれるなと笑へば、今更

立ち去りし大浦卓三に追願ひもならぬ次第、結局は六軒に三圓づゝ合して十八圓の匕より頭割に一人分を産出さんとすれど、熊公また首を振って、なアに旦那が忘れたんだ汝達に出して貰う筈がねエと濟し込めば、いよくこゝに熊公を客分として長屋中より受持の酒宴となりしが、さて例の業突張お虎婆は大の不承知、妾は酒も飲めず齒が抜けて喰ふものも割前だけは喰へぬと吐す、また色狂者の花野露雄は久しぶりの三圓を掴んで堤防を押し切りし洪水の如く何處の花柳界か淫賣宿へ、前夜より流れ出して不在との事に、朝鮮髯と西川と石作、おもはず舌鼓を打鳴しながら、さア斯うなれば我々で熊さんを徹夜の御馳走だ、畜生め香でも嗅けば嗅ぎ代を取ってくれるぞと叫び出しぬ、

三人で九圓のうちより四圓を出して、一人前に一圓づゝの酒肴、そもくこの八軒長屋こゝに開闢以來、いまだ會てこれなき大酒宴なり、

宴席は三人の圍引にて石作の塙と定め、鮪の刺身に鹽鯖の焼肴、赤貝の酢の物の味噌汁、酒は三升樽を荷ぎ込んで、加之も其日は朝より目を剥合うて一粒の飯も口に入れず、べこくになるまで腹を空して待受けながら、もはや絶體絶命いよく堪難き夕暮の頃ともなれば、豆ランプ二個の外に俵の番號を記せし熊公の提灯と神易の二字を現せし八卦よい屋の弓張提灯を軒先に吊して鼻氣を添へ、破疊三枚の上に大浦卓三が紀念の白毛布を敷連ね、主客四人ぐるりと魂魄の飛込みし酒肴を圍んで圓陣を構へつゝ、明日の浮世は知らず眼前の天下泰平に酔うて罪も報いも疝氣もあるものか、人間こゝに今夜の極樂浄土、さア矢でも鐵砲でも持つて来いといふ勢なり、

これでも昔は名ある料理屋の床柱に心配のない背骨を持たせながら燭臺の影より這寄る色目づかひの女に酌を取らした全盛男の成果ぢやと、西川が怪しげなる端唄を唸り出せば、いや

こよにも一人、米の價を知らぬ角地面の家庫を採潰して来た若旦那の落魄が居るぞと、石作の口三味線、拙者も母の胎内より八卦よい屋の算木箆竹を持って出ぬ隠し藝、これ見てくれと朝鮮髻が丸裸の餓鬼踊りに、熊公も古手拭の向鉢巻、ヤンヤ〜と手を拍ちぬ、大慶高樓に一夜萬金の宴を張って翌日の新聞紙上に謳歌せらるゝ當世紳士には、却って人しれぬ心の底に怖ろしき差引勘定の算盤珠を弾けど、あはれ八軒長屋の九尺一間に三升樽の底を叩きし四人の酒宴は胸に一物もない天真爛漫、たゞ茲に一つの不足は、今この同じ境涯に落込んで世を忍ぶ大不平の文士の筆端神來の畫伯なきが今夜の遺憾なり、四人もろともいつしか酔うて手足も利かすなれば、そろ〜泡を吹いて横這に蟹の如し、加之も口だけは人に譲らぬ八卦よい屋が、ほしやく〜髻を捻りながら、俄に瘦せたる肩を峙てよ白目を剝出しぬ、

「ねエ、熊さん、西川さんも石作さんも何と思つて居なさるゝい、そも〜酔つて件の如しぢやアないが、全體どういふ理由で今夜は四人だ、過日の一件で七味唐辛子喜助は遁出したまよだから仕方もないが後に現在まだ、二疋この席へ出なくつちやア濟まない奴が居る筈だ、大浦の大將が退際に長屋中いく久しく睦み合つて交誼よくしろと言はれたが、これで交誼よく一家同然に交はれるかね、あの因業婆といひ第一は拙者の隣屋に罷り在る馬の脚め、新参若輩の身も顧みず今夜の義理人情を平氣に外すたア、けしからん畜類だ、彼奴のために頬ツ邊を引ツ搔かれたり向脛へ喰ひ付かれた怨恨を今こよで言ふんぢやアない、こりやア長屋の制裁として何とかしたいもんだ、まして謝罪證文一札のある奴だぜ」熊公、おもはず片手を宙に打振りながら、片手に持ちし大湯呑の酒を下に置くや否、天井を仰いで笑ひ出しぬ、

「おい／＼今更野暮な理窟を荷ぎ出しちやア困るよ、酒は氣で飲み人ア心で面白く話せるんだ、もし彼お虎婆が糞慾の深エ黷ツ面で、のこ／＼こよへ遣ッて来て見ろい、堪らな
いぜ、ハ、ハ、ハ、その上また汝、あの色狂者に呵しな目配で妙な工合に小いやらしい女の素
恍惚でも聞かされて見ろ、それこそ胸が悪くツて折角の酒も肴も美味くねエよ、ハ、ハ、ハ、
なア西川さん」

十千萬圓の鑛業野郎は相變らず身を反して、家の内でも自然に西の方角へ馴れし尻目づかひ
の仔細めいたり、

「眞實だ、變な義理人情に割込まれて油に水の交るよりやア、かうして氣の合ツた四人が結
句の僥倖だ、しかし熊さん、大浦の大將は出來た人だね、あれが男だぜ、同じ人間に生れ
たからア、足跡でも宜いから、あよいふ工合に世の中を踏んで見たいよ、そも／＼この長屋

へ流れ込んできて出た奴ア、都合これまでに八人もあるが、木賃宿の梁に兵兒帶を懸けて首
吊往生の先生、狼狽へた雀に巢を作られさうな廬髪の行方しれすが二女、ごろ書生の煙にな
ツた奴が三人、近くは因業婆の氣絶に驚いて遁出した七味唐辛子、いづれも皆こよを満
足に出たンぢやアない、實は居るに居れない奴等で、こよから目出たく運を開いて立派に
出直した人間は大浦の大將たど一人だ、流石の西川も一言ないよ」

その左に酔潰れしは千三屋の石作、むくりと鑢首をあけて冷かに笑ひぬ、

「西川さん、感心するは宜いが流石の二字だけは少々、耳觸りだよ、ハ、ハ、ハ、ところで大浦
の大將もいよ／＼この長屋を出たとすれば、もう一蓮托生の飢饉佛でないね、つまり縁の
遠い京橋の中央で大家の御主人だが偕この主人に今まで通り尋ねて往ッて膝組に内談の出
来るものは、まづ誰だらうね、憚りながら石作こよに一人らしいぜ、何故ツて、さうぢや

アないか、大體この石作は運氣の閉塞がツた貧乏人の相手になれない家庫地面の商賣だからね、ハ、ハ、ハ、

一日、おもはぬ不意に京橋の大浦卓三より呼寄せられし熊公、やがて勢ひ込んで走歸るや否、何心なく振り返りし女房お菊の横ッ面びしやりと、十圓紙幣三枚で叩き擲りぬ、

「やい、この獸女、恐れ入ッて面の雜作を取方付けろい、ふざけた阿魔だ、過日この長屋中へ下すツた酒肴料に乃公一人が漏れた時、うぬア妙な面をしやアがツたぞ、え、おい、そんな事に如才のあるもねエも尋常な旦那と違ッてるんだい、畜生あれだけの御苦勞人といふ事が見えねエか、目のくり珠ア面の皮の破綻ぢやアあんめエ」
其まゝ飛出して、向側の西川が塙を差覗きぬ、

「西川さん、わッしも至急こゝを出ますよ、都合八人これまで満足に出た奴アねエといふがおかけで熊ア明日の朝か晝ごろ、煙にもならず確實な行方を定めて、兎も角も目出たく眼乞をしますよ」

その鄰屋の石作へも首だけ入れての大聲、

「千三屋さん、どうだね、過日は汝達の御馳走になツたが今夜ア、わッし一人で三人を客にするよ、どこへも出ずに口三味線の音じめを掛けて置いて貰ひてエ、氣の毒だが家庫の相談より此方の身が先に極ツたぜ、ハ、ハ、ハ、」

きくや否、待兼ねて自己より飛出せし朝鮮髯、俄に黄色の聲を振立てぬ、

「熊さん、どぞ全體どうしたんだ、外は差置いても拙者には委細の理由を熊さん、それでは済むまい立ッて居ちやア困るよ、まづ這入ッてよ」

「ハ、ハ、汝を遺して出るなア、何だか可哀さうな氣もするがね、どうも仕方がねエよ、實ア斯うだ、今朝、不意に京橋から直ぐ來いと使者でさ、往つて見るとね、や、驚いたぜ、思つたよりやア大層な商店だ、手代小僧の乗廻す自轉車が五六挺も門口にあつてね、椅子に倚つかよつた洋服の番頭が二三人も控へて居てさ、旦那ア奥に例の調子で大胡坐、やア來たかといふ言葉の下から三十圓の支度料で、いよく熊公お抱車夫、それも嫌なら何か外に喰ふ道を拵へてやるたア、涙が滾れたよ、乃公ア胸が一ぱいになつて御挨拶が仕得なかつたぜ、おまけに鼻アは米も味噌も自然に湧いて出る大きな臺所の取締よ、九尺一間で喰ふや、喰はずの山の神め俄運の放し飼に狼狽へて水瓶の中へでも送り込んだまよ水死を遂げなきア、宜いがと今から心配だ、これでも流石に夫婦の情だね、ハ、ハ、ハ、」

朝鮮髻おもはず熊公の袖を捉へて半泣の體なり、

「おい熊さん、細君の恍惚を聞くんぢやアないよ、この拙者は此まよ這處に取残されて、この後どうなるんだね」

「さう言つたつて仕様がねエよ、まア神妙に根氣よく淺草へ出て居るが宜い、その瘦っこけた身體で敵手不見につまらねエ喧嘩なんかしちやア無効だぜ、乃公が居なく無りやア猶更だ。其うち機會を窺つて旦那に何とか、お縋り申してやるからね」

「だつて熊さんに今、出て行かれちやア心細いよ」

「ハ、ハ、ハ、ことし四十八にもなつて何だい、馬鹿々々しい、しかし慾氣はあつても毒氣のねエ人間だ、もし喰へねエ事でもありやア旦那は兎も角、そつと乃公が食客的に置いてやるよ、どうか斯うか自分が這出した曉に昔馴染を振捨てるやうな熊さんぢやアねエさ」

浪六全集 第四編終

大正三年九月五日印刷
 大正三年九月十四日發行
 大正四年七月十五日五版
 大正五年三月十八日七版
 大正六年三月十五日七版
 大正七年八月十五日九版

大正八年四月二十五日十版
 大正九年六月十五日十三版

浪六全集第四編

定價金貳圓



著者 村上 吉
 發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地 加島 虎吉
 印刷者 東京市本所區番場町四番地 守岡 功



印刷 印刷株式會社分印

發賣所

東京市日本橋區 至誠堂書店
 本石町三丁目 電話本局 三六六六番 二一六七番
 東京市日本橋區 至誠堂第一分店
 人形町通住吉町 電話 口座 東京一七四四番
 東京市本郷區 至誠堂第二分店
 本富士町二番地 電話 下谷 二五〇二番
 電話 口座 東京一六九四番

十週年紀念名著出版の内

文學博士 三宅雪嶺先生著

獨言對話

本書は雪嶺先生が平易明瞭の談話體を以て實世間の事柄より深遠の學理に至る人
世一切の問題に就き最後の解決を下したる者收むる所、處世、人物、政治、婦人
及家庭、講演、雜の六門、句々皆金言、社會の一大木鐸たり。一讀修學上に、修
養上に、處世上に、專業上に、國民一般皆一讀して餘師あらむ。

積珍特製箱入全壹冊
紙數六百數十餘頁
定價金貳圓貳拾錢
郵稅金八錢

浪六先生著

裸體の人間

文明の粧飾を悉く剥ぎ取りし「裸體の人間」こゝに
出でたり、製本また總ての無用なる粧飾を廢して趣
味と實益の兩方面より内容を充實せしむ、浪六先生
三年以來の著書を人間あらゆる階級に薦む。

四六判上製全壹冊
紙數四百餘頁
定價金四圓
郵稅金八錢

十週年紀念名著出版の内

元帥山縣有朋公閣下題字 宇佐彥郷先生著

巨人海舟

國家の隆興は巨人の出現に待つ、世界に發展せんとせば先づ巨
人を研究せざるべからず、溯つては維新大活劇の真相を知り、
進んでは國運發展の大方針を知れ。

菊判總クローヌ特製
紙數八百餘頁全壹冊
定價金參圓八拾錢
郵稅金十二錢

元帥山縣有朋公閣下題字 坂本箕山先生著

元帥山縣有朋

出でて將となり入りて相となり長州三尊の爲し居然として群雄の上に見るの
誠直を以て終始一貫して武功文勳共に卓然たる坂本箕山先生は古今稀に見るの
偉人に於て其事業は即ち明治大正の活歴史なり、坂本箕山先生は古今稀に見るの
公の門に入ると共に國勢の變遷を詳にして更に狂介の昔に溯り細大流らさず公の事業
を記すると共に國勢の變遷を詳にして更に狂介の昔に溯り細大流らさず公の事業
して始めて維新を語るべく明治を語るべく大正を語るべく日露戦争を語るべく
るべく憲政を語るべく

菊判特製全一冊
紙數七百餘頁
定價金參圓五拾錢
郵稅金十一錢

井上十吉先生著 定價金四圓八拾錢

井上英和大辭典

▼英學界が久しく英和辭典に對して要求せる總條件は本書に於て始めて全し
▼語彙に二十萬普通の單語、一切の熟語、慣用句、故事、難句、勿論、嚴肅な科學的術語、輕妙滑稽なる諧謔語、遊戯的、俚語、隱語、俗語、神話、傳説、フスター、ダウド、ウエブスター、オックスフォード等の大辭典にすら發見し能はざる文字も、其抱括的なること之れ以上、適切なる文例を擧げて一々語句の用法を明示し、且其文意に應じて或は雅辭、或は難語を綴り、驅使して適譯を附したれば、難

解の英文、忽ち暢達の邦文に化し直に取つて、現下の世界大亂によりて生じたる最新の辭書、唯本字のみ見るべし、蓋し世界中の最新文字の或るもの如きは、蓋し世界の先生、獨特の發音法は正確にして、簡易英國、專門家の張目、驚嘆せしむるべきものたる、米の權威的大辭典を凌駕する特色を有するは、辭書界の大異彩たり、編纂上の奇蹟たり、固より、苟も英語に關係ある諸君は、必ず本書一巻を座右に備ふる絶對的必要あり

◎縦五寸六分一横三寸一分
◎紙數—本文三千三百廿六頁
◎附錄—數十頁
郵稅金拾貳錢

井上十吉先生心血を瀦く實に

七箇年眞個絶大なる精力の結晶體として本書大成す

の大事業完成す

世界の自由郷理想境は茲に開拓されたり

本書編纂の爲に
官を辭したるに
著者の意氣と
苦心を想へ

本書は未だ曾て何人も企及し能はざりし日英兩語の完全なる融合を遂行し、和英辭書の總べての必要條件を悉く備へたるものにして、正に一切の和英辭書の集大成とも云ふべく、實に空前絶後、斷じて他人の模倣追従を許さず、其實質と價値は永久にして絶對無限、卓然として最高の權威を無窮に保有する大著なり。苟も英語を修めて其正確を期し、蘊奥を究むるの速ならんことを希ふの士は、過去の辭典を一擲して本書に來れ。是れ實に忠實眞摯なる士の現前に執るべき態度也。

代英學界は急速の歩進を感ぜず

斬新なる合理的編纂法を以て排列し檢索の至便等曾て其比を見ず。譯語の正確劃切なるは著者の獨擅場にして、故事成句慣用句を悉く集め、英譯法の正統たるべき文例を豊富にし、日本語脈と英語脈との融合を遂行したる等、未だ曾て本辭典の如く完璧に達せる理想的大辭典はあらず。試みに一本を手にせば、本書が如何に類書に卓然として傑出せるかを認め得べし。苟も英語を修め、其正確を期し、蘊奥を究むるの速ならんことを希ふの士は、過去の類書を一擲して本書に就かざるべからず。

擲して本辭典の權威に下信を慕はば

威權の界書辭

【著生先吉十上井】

典辭大和英 壘

◆全國中學校にて指定の光榮を得◆

英語學
上の三
大要件

- 第一に 自己の努力
- 第二に 良師の誘導
- 第三に 本書の使用

定價金五圓

郵税内地金拾八錢

紙數本文二千三百二十六頁◆附錄數十頁◆語數實に二十萬語
縦五寸六分◆横三寸一分◆編製金文字入特製紙半美本◆

語數 譯例 文解 註解 術語
のののののの
のののののの
のののののの
のののののの

包正至功鮮明
含確便敏

なる本類書に於
ては第一の動
詞の非論第三
の一致から
なる第一の動
詞の非論第三
の一致から
なる第一の動
詞の非論第三
の一致から

音福の界學英

【著生先吉十上井】

典辭中和英 壘

◆完全にして簡便なる唯一の中辭典!◆

中等學生諸君の絶好の師友はこれ

本書特色

- ◎教科書中の語句の網羅
- ◎假名應用發音法の完成
- ◎譯語の平易解釋の正確
- ◎熟語及び慣用語の夥多
- ◎最新語の豊富なる収録
- ◎文法上説明の周到親切
- ◎略語他國語の本文配列
- ◎重要なる固有名詞詳解
- ◎振假名と挿畫との豊富
- ◎内容の充實容積の輕便

紙數千四百餘頁◆附錄五百餘頁
新式ナール法字◆總假名付
縦五寸◆横二寸五分◆總布製堅牢美本
定價貳圓六拾錢 郵税拾錢

本書が中等學生用として完全無
缺なるは弊堂の確信として疑は
ざる處にして本堂の諸君に於て
は怡もプロペラの飛行機に於て
は恰も如し、殊に本堂の諸君に
色とが知るは、殊に本堂の諸君
温情が書中隨所に流れて中
生諸君を指導するにありて中

浪六先生傑作

裏と表

労働問題を扱へる傑作！

一枚の紙にも裏と表とあり、まして複雑なる社会の人間萬事、まはちこれに裏と表の無きしものはなし、浪六先生は人生社会の裏を突めんとして労働問題の悲劇の裡に悲痛哀艶、痛快壯絶の幾場面を紙上に描出した。興味津々たる近來の快小説として必讀を乞ふ。

菊各拾 版册金 製貳郵 美圓貳 本編各 前編各 中編各 編五拾 錢拾

裸體の人間

文明の粧飾を悉く剥ぎとりて裸體の人間こゝに出現せしむ。浪六先生近來の傑作人間あらゆる階級に薦む。

四六版上製全壹册 紙數四百余頁 定價金八圓 郵稅金八錢

浪六先生著

大正五人男

一大奇書

廿餘年前に讀書界を震撼せしめ今日なほ出版を重ねつゝある當世五人男の著者浪六先生茲に又新たな大正五人男を世に出さる

菊上製英本 全一册 定價金壹圓八拾錢 郵稅金八錢

男女の戦績

全二册定價各金壹圓廿錢郵稅各八錢
 誠實の和睦は戦の後にあり、神聖の戀愛は男女衝突の後に生ず
 男女あらゆる階級の衝突、男女あらゆる思想の衝突是れを讀まざるもの今日男女にあらざる階級を網羅せしめ男女の社会あらゆる階級に入る、男女兩性を戦ひ、よく、白兵戦に入る、男女兩性を赤裸々に剥出したる人生の裏面史なり

黒雲

全一册 定價金壹圓廿錢 郵稅八錢

雪達摩

全一册 定價金壹圓貳拾錢 郵稅八錢

浪六全集 縮冊

<p>第十編 ▼▼▼▼▼ 同元同同同 後藤武士</p>	<p>第六編 ▼▼▼▼▼ 同金日本や鬼 後削武とあ 編益士心み</p>	<p>第一編 ▼▼▼▼▼ 同同同同同 後續後後後 編編編編編</p>
<p>第十一編 ▼▼▼▼▼ 同仍同同同 後如續後 編件編編編</p>	<p>第七編 ▼▼▼▼▼ 同古同同同 後武氣賀市</p>	<p>第二編 ▼▼▼▼▼ 同同倉同同 後橋幸續後 編編編編編</p>
<p>第十二編 ▼▼▼▼▼ 同夜同大 後又後恐 編男編覽</p>	<p>第八編 學問人 編續編正 表裏の世きう</p>	<p>第三編 ▼▼▼▼▼ 品花吉同同川 さ田續後上 だ雄編編古 め車織編編</p>
<p>第十三編 ▼▼▼▼▼ 同武同同同 後士續後 編道編編編</p>	<p>第九編 ▼▼▼▼▼ 同男同男 後一後 編正編山</p>	<p>第四編 屋長軒八 卷上</p>
<p>第十四編 ▼▼▼▼▼ 元當 編女女</p>	<p>▲金定▲ 編各價編 八各貳各 錢間冊入</p>	<p>第五編 屋長軒八 卷下</p>

71
489

終